

## 身近にある毒草 9題

### Poisonous Weeds are Near at Hand : Nine Examples

前 山 和 彰

MAEYAMA, Kazuaki

#### I は じ め に

ギョウジャニンニクのはずが・・・【中富良野】上川管内中富良野町の夫婦が、自宅前で山菜と一緒に有毒なイヌサフランを採取して食べ、60歳代の妻が肝機能障害で重体、夫が軽症となっていることが24日分かった。（2003、5、25北海道新聞朝刊より）

富良野保健所によると、夫婦は2003、5、20日夕、庭で栽培していたギョウジャニンニクをジンギスカン用に採取した際、イヌサフランも誤って採って食べた。2人は同日夜、激しい下痢で病院に運ばれ、同保健所は食中毒と断定した。

イヌサフランは欧州原産のユリ科植物。茎に毒性の強いコルヒチンを、含み、葉は同じユリ科のギョウジャニンニクと似ている。夫婦は花の観賞用に植えていたという。同保健所は「山菜シーズンだが、食用かどうか十分確認を」と話している。

近年、自然を見直そうという運動が日本全国津々浦々で活発になり、その一環として山菜や薬草がたくさんの人々に親しまれてきている。また、それらに関連した「食用になる草木」や「健康に役立つ植物」などの書物が店頭をにぎわしている。ところがしょせん素人の方による判断に判別をゆだねていることから、自然志向が過熱すればするほどこれらに関係した事故の方も数を増やして来ているのが現状である。好奇心による事故もあるが、多くは植物について充分知識をもたないために、あるいは生かじりの知識による事故も少なくない。食用不可のものと山菜や薬草とまちがえて食したり、あやまって飲用したために事故に遭う場合も多々ある。新芽は山菜として食しても、果実は有毒な植物も少なくない。こうしたことから新芽が食用だから果実も毒でないと、素人判断して果実酒を作って中毒した例もある。

あるいは、あまりにもおいしそうであるために食したり、手近にあるために子供が口にしたりして中毒したケースも少なくない。これは、どうしても植物についての知識の不十分さにあると考えられる。

ごく身近にあり、目にしたこともある数種類の有毒植物について考察する。

## Ⅱ 有毒植物9種類

### 1. 【トリカブト】(キンポウゲ科)

方言名 エゾトリカブト、オクトリカブト、タイセツトリカブト など

#### ・〔生態と特色〕<sup>1)</sup>

- ① 1m以上にもなる大型の多年草で、丈の割りには茎が細く真っ直ぐに立っているよりはよく曲がったり傾斜したり、たれさがっているものが多い。
- ② 花の色は美しく、夏から秋にかけてみな青紫色をして咲く。花の形に特色があり、雅楽のときにかぶる冠（烏兜）に似ていることから名前がつけられている。
- ③ この種の葉はみな類似していて、1枚の葉の裂け具合や、浅いか深いか、あるいは厚いか薄いかによって名前も分かれている。この手の形状をした葉は他にも数多く類似したものがある。そして山菜としてや薬草として扱われる植物にもいろいろあるために多くの事故をまねくことになっている。特に新芽や若葉の頃にはかなり判別しにくい状態にある。

#### ・〔分布と自生〕

- ① 一般的には北に多い植物で、特に北海道には多く自生している。
- ② 低いところから高所にいたる草原や、林の中の陽のあたる所を好んで見られるが、ワラビやゼンマイの中にも相当混成している。あるいは事故のよくおきるニリンソウやヨモギ、ゲンノショウコなども同居していることはしばしばである。

#### ・〔注 意〕

- ① トリカブトと聞いただけで、煮ても焼いても強い毒素の消えないところから、オカにあがったフグのように恐れられている。全草に強い毒素を持ち、特に塊根の部分に量が多く、原住民が毒矢に使用されたのは、この根を秋に掘ってよく乾燥させて使用したと伝えられている。
- ② もちろん、葉や茎にも毒を含有しているが、花にもさらに花粉にも毒があるために、これから集めたハチミツにも同様有毒成分が検出されるほどである。
- ③ ところで、このトリカブトが事故の原因になるのは、山菜の旬の芽吹きの際に、色々な山菜に類似していることが大きな要因である。しかも、いかにも山菜としておいしそうに見えることや、悪臭や切り口から特有の液が出ないことから一層まちがえてしまう原因にもなっている。何とんでも若芽や若葉の形容が同じ科のニリンソウやセリ、ゲンノショウコ、ヨモギにとってもよく似ている。その中でもニリンソウとの判別にあやまちがあるので充分注意が必要である。白い花が二輪咲いているとニリンソウである。
- ④ トリカブトアルカロイドの毒は多くの毒素に並んで、太古の昔から狩や戦争に用いられてきたものである。トリカブトは日本ばかりでなく、インドや中国、ヨーロッパにも自生していて強毒の固体が多く、主として毒矢に用いられたものが多い。

・〔薬 草〕

- ① 「毒と薬は紙一重」といったところで、トリカブトは正しく利用すれば多くの人の命も助けることのできる薬でもある。
- ② 塊根を秋に掘って乾燥させたものが生薬で、カラスの頭に似ているので「烏頭（うず）」「附子（ぶし）」といい、主として強心、神経痛、リュウマチなどの鎮痛の薬理作用がある。使用が許されるのは専門医の方のみで、一般には絶対に手を出してはいけない代物である。
- ③ 誤食し量が多いと、嘔吐、下痢、よだれ、手足のしびれ、そして強いケイレンを起こして死亡するといわれている。

・〔食 用〕

煮ても焼いても、食用にはならない。好奇心から試食するなどは、命が代償であることを考慮に入れるべきである。

・〔類似植物〕

- ① トリカブトの仲間には相当多くあるがすべて有毒で、毒を代表するキンポウゲ科の筆頭であり、歴史的由緒ある有毒植物でもある。
- ② キンポウゲ科の仲間には毒素をもつ植物が多く、しかも強毒のものが多い。  
トリカブトに近いレイジンソウ（伶人草＝雅楽で女性が頭に作る帽子）はとても葉や形態がよく似ている。その他、キンポウゲ、キツネノボタン、フクジュソウ、カラムツの仲間、オダマキなどがある。

## 2. 【クサノオウ】（ケシ科）

タムシグサ、イボクサ、湿疹（クサ）の黄（オウ）、瘡（クサ）の黄（オウ）。

・〔生態と特色〕

- ① やや大型の60cm～100cmになる2年草で<sup>2)</sup>初夏に4枚の美しい黄色の花びらをもつ花で、果実はタテに長く1箇所から数個つける。
- ② 葉は互生し1～2回羽状に深く切り込んでいる。全体はやわらかで白粉を帯び、特に茎や葉には縮れた毛を有している。茎は中空で、折ったり傷をつけると汁は、空気に触れるた瞬間に橙黄色に変わり、とてもおいしそうなものではない。

・〔分布と自生〕

- ① 日本全土に広くある。
- ② 日のよく当たる住宅周辺、空き地、道端などにごく普通に見られる。

・〔注 意〕

- ① ケシ科の植物は大なり小なりすべて毒をもっている。また、有用植物でもある場合が多いが、ただしこれは使用方法によるので注意が必要である。
- ② 皮膚病に関係のある名を有しているが、生汁は皮膚の弱い人はかぶれを起こす危険性がある。

る。また、誤って飲食すると胃腸のただれや、多食すると体から力が抜けて長く眠ってしまうといわれている。

- ③ クサノオウは茎を切るとすぐオレンジ色の汁が出るのが目安である。

・〔薬 用〕

- ① タムシやイボクサの異名を有するだけに、クサ（湿疹）の王ともいわれている。

生の茎や葉のしぼり汁がタムシやイボとり利用されたこともある。

- ② 皮膚の弱い方は注意を要する。

・〔食 用〕

一見やわらかな草なので手を出したくなるが、食用にはむかない。

・〔類似植物〕

ケシ科の名がつくものは全て有毒であると覚えておくことが肝要である。

タケニグサ、ヤマブキソウ、ハナビシソウ、ケマンの仲間、勿論ケシやコマクサも有毒植物である。

### 3. 【スズラン】（ユリ科）君影草（キミカゲソウ）

・〔生態と特色〕

- ① 一般によく知られている植物でむしろ園芸種として名が通っている。庭先で広く見られるものはドイツスズランといい、日本のスズランとは別種のスズランである。

- ② 香りが良く可憐な花は切り花にも広く利用されている。

- ③ 昭和の初期に、かの有名な牧野富太郎博士がスズランはラン科の植物ではないことから、キミカゲソウ（君影草）にしようと提案したが、一般化されてはいない。

・〔分布と自生〕

本州中部以北、北海道に多く自生しているが、近年開拓、開発が進み自生種は絶滅の危機に瀕しているのが、現状である。一般にはドイツスズランが園芸種として栽培されている。

・〔注 意〕

- ① スズランに毒のあることは多くの人知っている。もちろん日本産、ドイツ産も同様である。

- ② 新芽はいかにもおいしそうで山菜として扱いたくなりそうである。特に、同じユリ科のアマドコロ、ナルコユリに似ているので注意が必要である。また、ギョウジャニンニクとの誤食例がしばしばある。ギョウジャニンニクはニンニクとニラの中間の強い臭いがするので、新芽時につぶして見るとすぐ解る。

・〔薬 用〕

鈴蘭根（スズランコン）として、強心、利尿に利用されているが、家庭で使える薬草ではない。

・〔食 用〕

食用としては、不向き。

・〔類似植物〕

ユリ科の仲間でバイケイソウ、イヌサフラン、といった毒素の強い植物があり。ナルコユリ、アマドコロ、ギョウジャニンニクなどの新芽によく似ているので注意が必要である。

#### 4. 【イヌホオズキ】(ナス科) 生薬名 竜葵 (リュウキ)

・〔生態と特色〕

- ① 植物の名前は、本物でないもの、または食べてもおいしくないものには、頭に動物の名前がつけられている。例えばカラスノエンドウ、ヘビイチゴなどといった具合である。
- ② 草丈は50cm～80cmになり、多くの枝を斜状に伸ばし大株になる。葉は厚手で長く、ふちに波形の鋸歯がある。
- ③ 花は夏から秋にかけて白色のものをつけ、節の中間から花枝を出す。  
果実は黒く球形で液質にて、直径が8 mm位になる。

・〔分布と自生地〕

- ① 日本全土に広く分布し、世界の温かい地方にも多いとされている。
- ② 日当たりを好み、山道、荒れ地、道端、家の周辺にも自生する。

・〔注 意〕

- ① 昔から毒草として知られているが、民間薬としても利用されている。
- ② 全草に有毒成分を有している。子供が遊んでいて果実をつぶした液が眼に入った事故もある。充分注意する必要がある。
- ③ ナス科の植物には、チョウセンアサガオはじめ、ジャシリドコロ、ヒヨドリジョウゴなど毒素の強いものの種類が多い。

・〔葉 草〕

夏から秋にかけて全草を取って乾燥させたものを竜葵 (リュウキ) といい、解熱や利尿に利用されているが、素人の方は、漢方医に相談することが必要である。

・〔食 用〕

全草の若芽をゆでて利用している所もあるが、毒素が薄くなるとはいえ、近づかない方が無難である。

・〔類似植物〕

ハダカホオズキ、ヒヨドリジョウゴと混同しないよう注意が必要である。

## 5. 【スイセン】（ヒガンバナ科）水仙

### ・〔生態と特色〕

- ① スイセンは、殆どの方に知られている。ただし園芸種ばかりでなく在来の野生種が多くあるが日本本来のものではなく、昔観賞用に入ったものが畑から脱出したものである。
- ② もっとも園芸種はとても多く、いけ花の材料に広く利用されている。
- ③ 花は咲くが実が出来ず、もっぱら地下の鱗茎で増殖している。

### ・〔分布と自生〕

日当たりのよい明るい所に自生するが、園芸種が多く庭先に見られる。

### ・〔注 意〕

- ① スイセンが有毒植物であること、また、その仲間の（園芸種）もすべて有毒である。  
全草に毒成分を有しているが、とくに地下の球根に多く含まれている。
- ② スイセンによる単独事故はあまりないが、ニラやアサツキ、アマナの葉と一緒に刈り取って誤食することがある。注意を要する植物である。
- ③ 中毒は、胃腸炎を起こしたり、頭痛、下痢、吐き気が起きる。

### ・〔薬 用〕

漢方医の相談を受けてから使用する。

### ・〔食 用〕

全草有毒であり、食用にはならない。

### ・〔類似植物〕

スイセンの仲間はすべて有毒であり、注意を要する植物である。

## 6. 【アサガオ】（ヒルガオ科）生薬名 牽牛子（ケンゴシ）

### ・〔生態と特色〕

もともと薬用として平安初期に渡来し、特に江戸中期に品種改良され園芸用になった植物である。

### ・〔分布と自生〕

野生のアサガオは紀州はじめ四国や九州の一部にあるが、一般のアサガオは周知の通り一般家庭で園芸用に栽培されている。

### ・〔注 意〕

- ① アサガオの種子には、下剤としての作用があるところから渡来して来ている。
- ② 幼児や子供の中毒の中で、このアサガオの種子を誤って飲んだ例が特に多い。応急処置として、まず水などを飲ませて、すぐにのどに手を入れて吐かせ、病院へ行く必要がある手近にあるだけに注意が必要である。

- ③ なじみの深いサツマイモもヒルガオの仲間、昔は多く地下溝などで貯蔵していた。

長い間に黒斑病の寄生により、有毒な苦味物質が発生する。昔からカゼを引いたらイモや黒色ものは食べるなど言われているが、もったいないからといって家畜に食わせて死んだ例もある。黒くなったサツマイモは要注意である。

・〔薬 用〕

- ① もともと薬用として渡来し、今日でも使用分量を正しく使用すれば有効な下剤なわけであるが、絶対に量をすごさぬことが肝要である。
- ② アサガオの種子を乾燥させたものを牽牛子（ケンゴシ）といい、昔から伝承薬として、生薬のもみ汁を外用薬として、ハチやアブ、また、害虫さされに利用されている。

## 7. 【レンゲツツジ】 漢名 羊躑躅（ツツジ）

・〔生態と特色〕

- ① あまり大形（1m～2m）にはならないツツジであるが、枝別れが強く、したがってその先端に花を各々つけるので、この群生地ではまるでジュウタンをしきつめたほど見事な景観を見せる。花の色には赤の他黄色や肌色などがある。
- ② 園芸用として広く庭先で栽培されている。ただ増殖しにくい木である。

・〔分布と自生〕

- ① 日本国産の木で、北海道をはじめ九州全土に広く分布している。
- ② 山の高原、草原あるいはやや湿地などの日当たりのよい所に群生している。
- ③ 庭の花木として人気のある木である。

・〔注 意〕

ツツジ科の仲間には有毒種が多くしかも毒性（神経マヒ作用）が強い。有毒植物の中の大手の一つでもある。

・〔薬 用〕

一般薬用としては利用されない。

・〔食 用〕

現代の子供は、花や花の蜜を口にするようなことはないが、昔は花やその蜜をよく吸ったものだが、親達は、ツツジの花には毒があるからだめとよく叱ったものである。だが、今日ではそんなことを知る親も殆どいないようである。

・〔類似植物〕

ホツツジ、アセビ、美しいシャクナゲも同属で有毒植物である。

## 8. 【フクジュソウ】(キンポウゲ科)

### ・〔生態と特色〕

- ① 幸福につながる花、あるいは縁起の良い花として昔から愛用され、一般によく知られている植物である。
- ② 茎は30cm位になり、いくつか枝を分けている。寒地では一般には春先に新芽が伸びたら、葉が殆んど出ないうちから花は早々に咲くという少し変わった植物である。

### ・〔分布と自生〕

北に多い植物で西日本には少ない。山林の中や山地のやや湿地を好む。早くから園芸化され、山草として庭花として広く楽しまれている。

### ・〔注 意〕

- ① 素人のなまかじりや、ちょっとした知識が事故のもとで「強心」という薬に注意する必要がある。確かに薬草でもあるので専門医の利用もあるが、一般の方は絶対に手を出してはいけない劇毒植物である。

葉がニンジンに似ていることから、山菜としての誤採取の可能性があるが、花がつくとすぐ判別がつく。花のついていない分にはくれぐれも注意が必要である。

- ② キンポウゲの仲間でもトリカブトに並んで気をつけなければならない植物である。全草に強心配糖体のシマリンやアニドキシンを含み激しい薬理作用として、誤食すれば嘔吐と呼吸困難、やがて心臓マヒを起こして死亡するという劇毒植物である。

### ・〔薬 用〕

心臓に良いからといっても、個人の利用は避けるべきである。

### ・〔類似植物〕

トリカブトをはじめ、キンポウゲと名がついたら注意を要する植物である。

## 9. 【バイケイソウ】(ユリ科)

### ・〔生態と特色〕<sup>3)</sup>

- ① 新芽の頃には、ギボウシの芽に非常に類似しているため、中毒の大きな原因となっている。
- ② 花茎は長く初夏から夏にかけて緑白色の梅に似た多くのふさ状になった花を咲かせる。果実は長さ約2cmのさく果をつける。

### ・〔分布と自生〕

山地や林の中でよく日が当たる所の湿地に群生する。

### ・〔注 意〕

- ① 誤食して中毒する中で多いのがこのケイソウ類である。新芽の時には確かに、巻いたヤリ



状の芽が、同じユリ科のギボウシによく似ている。図鑑等では、どうしてもオールシーズンの成長過程が表現しにくいためにまちがえる原因にもなっている。

成長してしまえば、もっとも食用にはしないが相異していることが判明する。

- ② 新芽や葉にも毒分を有し、特に根茎や根に毒分が多く、昔から根を掘って殺虫剤を作っていたほどである。全草が有毒であり注意を要する。
- ③ 毒性は強くゆでて熱を加えたからといって毒素は消えず、ひどい下痢や、はきけを起こすといわれている。重症になると血管がひろがり血圧降下を起こしたり呼吸減少となったり、手足のしびれや、けいれん、虚脱状態、さらに意識不明、場合によっては死亡するというおそろしい植物である。

・〔薬 用〕

農用殺虫剤として利用されたこともあるが、現在は使用されていない。

・〔食 用〕 ギボウシなどの誤食にあわぬことが大切である。

煮てもゆがいても、てんぷらにしても食用にはならない。

・〔類似植物〕

ユリ科の仲間には特に強い生理作用を起こす有毒植物が多くある。

コバイケイソウ、スズラン、ユリグルマ、いずれも毒成分が強く危険な植物である。

### Ⅲ お わ り に

NHK札幌放送局が、1994年（平成6年）5月14日（土）午後7時30分、道内で放映した『北海道中ひざくりげ』。放映されたのは「春は川のせせらぎにのって・標津川」「毛ばりで狙うアメマス」「山菜ドッサリ」の三部門。その中の「山菜ドッサリ」の部門で、「中標津町の山菜愛好家が、バイケイソウの根を掘り、手に持ち指で示しながら『酢の物として食べます。』とコメントしたから大変。「食べられない。」と道内の野草研究者から強く指摘を受けて、あわてたNHKは、15・16日の両日にわたり、道内ニュースの後に「バイケイソウは有毒なので食べないでください。」と呼びかけると同時に「おわびして訂正します。」の放映をしていた。山菜の旬であったが、事故も起きずに済んだことは幸いであった。バイケイソウ、トリカブトなどは、猛毒であるため昆虫も動物（牛、馬）なども食べないのは勿論である。相撲の番付にすると、東の横綱がトリカブト、バイケイソウは西の横綱に相当する。

毒植物であるかどうかについては、外見だけで判定しがたいことが多く、判別法の決定的な見分け方の定説もない。

一般的に、例えば、毒々しい花や果実という表現をしても、その形容は受け止める人によって、それぞれの感覚に差異があるため、むずかしいことが多くなる。

毒々しくない植物に毒があるために、判別には困難を来してしまう。

次に、臭いや汁の出るものにも要注意といわれているが、これも一つの目安でしかない。ト

リカブトは臭いもなく、汁が出ない上に、ちょっとかんでも、別の植物と特別なこともないが知っての通り猛毒植物である。タンポポのように白い苦い汁が出ても、おいしい山菜もある。要は、悪臭や汁が出なくとも、要注意の有毒植物が多いということを知っておく必要がある。かんで甘かったりする果実にも有毒の植物も多くある。しかし、刺激性があれば、注意が必要である。

このようにして見ると、毒草の決定的判別法など、まずないことを知っておかなければならない。ましてやキノコの仲間になるとなおさら判別がしにくい。

そこで、とにかく一つ一つの植物について、よく知ることに方法はないといえる。それも植物の一部、例えば、葉のみでなく果実であったり、根であったり、花といった他に比較できる部分について調査、研究する必要がある。

### 注

- 1) 中井将善 (1990): 毒草100種の見分け方: 金園社 p34
- 2) 山田恒史 (1997): 植物の世界 : 朝日新聞社 p 8 - 205
- 3) 山田恒史 (1997): 植物の世界 : 朝日新聞社 p10 - 78

### 参考文献

- 1 中村 浩 (1974): 牧野富太郎植物記 あかね書房
- 2 長田武正 (1984): 野草図鑑 保育社
- 3 狩野 誠 (1989): 薬になる野菜と野草 福音社
- 4 大木幸介 (1984): 毒物雑学事典 講談社
- 5 林 弥栄 (1983): 日本の野草 山と溪谷社
- 6 犬飼哲夫 (1977): 北の新博物誌 読売新聞社
- 7 山岸 喬 (1992): 北海道薬草図鑑 北海道新聞社